

## 基調報告

### 大会主題 「生きる力を育てる新聞教育」

#### I 「生きる力」と「新聞教育」

21世紀は、新しい知識や情報、技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として重要性を増す「知識基盤社会」の時代ともいわれている。今の時代は、変化のスピードが速く、知識や技能が国際的に活用されるなどグローバル化が見られ、常に新しい課題に対応することが求められている。

こうした時代を生き抜くために、3月に告示された学習指導要領は、

- 教育基本法の改正で明確になった教育の理念を踏まえ、学校に「知識基盤社会」で必要となる「生きる力」を育む
- 知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視し、すべての教科・領域の中で「言語に関する能力」を重視する
- 道徳教育や体育などの充実により、豊かな心や健やかな体を育成し、「体験活動」を充実することを基本方針として、改訂されている。

これまで積み重ねてきた新聞教育の理念や成果、たとえば、

- ・ 生きた最新の情報を教材とし、新聞記事を通して、情報に親しみ、情報を読み解くこと
- ・ 新聞記事から、自ら課題を見つけ、主体的に考え判断して解決を図ること
- ・ 新聞づくりを通して、仲間と協調し、情報発信すること

は、今日求められている「生きる力」の育成にもつながる。これからは、今までの成果を受け継ぎながらも、新しい教育課程に対応できるように工夫・改善していく必要がある。

#### II 新学習指導要領と新聞教育

改訂された学習指導要領の方向性と、教育内容に関する主な改善事項の中から、特に新聞教育と関わりの深い項目について分析し、これからの新聞教育のあり方を考えたい。

##### 1、基礎的・基本的な知識・技術の習得 ～ 言語活動の充実

新聞教育の活動の基礎・基本となる力は、「読むこと」「聞くこと・話すこと」「書くこと」など、「言語活動の充実」と密接に関連している。具体的な活動場面として、

- ・ 「読むこと」 ～ 新聞記事を読む（新聞活用、新聞機能）、自分や友達が作成した原稿や記事を読む（新聞づくり） など
- ・ 「聞くこと、話すこと」 ～ 新聞記事に関する意見交換（新聞活用、新聞機能）、新聞記者による話（新聞活用、新聞機能）、取材活動（新聞づくり）、作成した新聞の感想交流（新聞づくり） など
- ・ 「書くこと」 ～ 新聞づくり、新聞記事の要約（新聞活用）、新聞記事を読んだ感想（新聞活用、新聞機能）など があげられる。

小学校国語の3、4年生では「報告する文書を書いたり、学級新聞に表したりする」、5、6年生では「編集の仕方や記事の書き方に注意して新聞を読むこと」、中学校国語2年では「新聞やインターネット、学校図書館等の施設などを活用して得た情報を比較すること」とある。国語の教科の中では、知的活動の観点から、「記録・報告」「説明」「まとめて表現する」ことの一助を新聞教育が担っているのが伺える。

これからも「言語活動こそ、すべての学習の基盤である」と考え実践を推進していきたい。

## 2、学習意欲の向上や学習習慣の確立

新聞教育では、「新聞を使った勉強がおもしろかった」「新聞をつくって楽しかった」という子どもたちの声がたくさん聞かれ、学習意欲の向上にもつながっていると考えられる。新聞教育は、様々な学習の場面で目的に即した活動が可能であることから、今後も新聞を媒体としたさまざまな学習が数多く実践されるものと思う。

新聞スクラップは、見通しを立てたり、振り返ったりしながら継続して取り組むことができ、新聞づくりにおける「編集会議」も、子ども自らが学習に見通しを立てる活動である。今後も、このような活動を通して、「学習計画の大切さ」に気づき、「自ら学ぶ」習慣の定着へと広げていくことが可能である。

## 3、社会の変化への対応の観点から教科等を横断して改善すべき事項

### ～ 情報リテラシーの基礎・基本として

情報教育の充実のためには、単にパソコンやインターネット等の操作技術の向上だけではなく、それらを正しく使いこなせる力、いわゆる情報リテラシーの育成も急務である。「読む、聞く、話す、書く」の言語力に加え、「絵を描く」「写真をとる」など基本的なメディアを使う場合においてもリテラシーの育成が必要であり、それらの統合こそが「新聞づくり」の学習活動と言える。

メディアを使った遊びや簡単な「新聞づくり」をステップアップさせながら、情報を新聞として学校から家庭・地域と広げていくことが、情報教育の基礎・基本を培うと考える。

## Ⅲ 北海道十勝新聞教育研究会がめざすもの

本研究会は、1990（平成2）年に設立。新聞講習会、実践発表会、公開授業研等を積み重ね、1995（平成7）年には、第38回全国大会・北海道帯広大会を開催した。

翌年から、大樹町、新得町、芽室町、帯広市、音更町、幕別町、豊頃町、帯広市、鹿追町と管内市町村で研究大会を開催し、2005（平成17）年には、北海道で2度目の全国新聞教育研究大会を帯広市で開催した。6本の公開授業と提言発表を行い、十勝の新聞教育に関わる熱意を質・量ともに示したのであった。その後も幕別町、音更町と研究大会を開催している。今まで、全ての研究大会で公開授業を設定するなど、実践重視で研究を進めてきた。

昨年度の音更大会の公開授業でも、下士幌小学校の小学3年生の総合的な学習の時間「地域をくわしく調べよう」の授業が公開された。十勝新聞教育研究会OB会主催の「新聞づくり講座」を活用した「新聞づくり」のまとめの段階での授業で、より良い見出しの話し合いから、意欲的に見出しを作っていく子どもたちの様子を見ることができた。このような実践を参考にしながら、新聞教育を教育活動にしっかりと位置づけ、年間指導計画にも明記していけるかが、今後の課題である。

これまで新聞教育では、活字を読み、確かめ、話し合うことで情報活用し、学ぶ心を育んできた。そこには、考えること、学ぶことを通しての協働作業があり、「新聞づくりは仲間づくり」という言葉に代表されるように、新聞教育には「心をはぐくむ教育」「ぬくもりのある教育」がある。調和のある人間形成を目指してきた新聞教育の財産は、今後も一層その重要性を増していくと考えられる。

これからは、

- ・「意図的・計画的・組織的」な活動
- ・確かな根拠に基づく活動
- ・目的・ねらいに即しながら、「教えて考えさせる」活動
- ・各教科で培った基礎的な力を応用できるところまで高める活動

であることを大事にしながら実践を積み重ね、新聞教育の意義と効果を検証していきたい。